



ネペンテス・ピカルカラタ(落)



ネペンテス・トルンカタ(落)



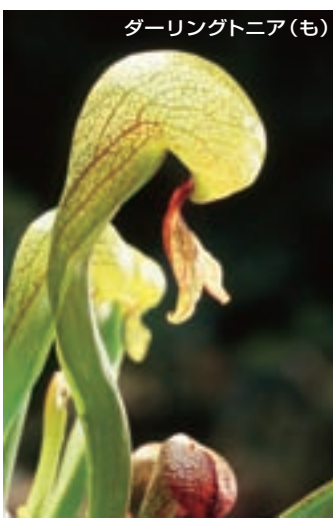
ネペンテス・イネルミス(落)



ケファローツス(落)



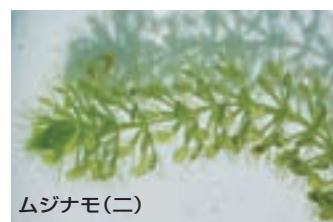
サラセニア(も)



ダーリングトニア(も)



ハエトリグサ(二)



ムジナモ(二)



サスマタモウセンゴケ(と)に捕らえられた昆虫

(落)=落とし穴型
(も)=もんどり型
(二)=二枚貝式わな型
(と)=とりもち型
(吸)=吸い込み式わな型



栽培のコツ

- ミズゴケに植える。ミズゴケは1年で傷むので、毎年新しいものに植え替える。
- 日当たりを良くする。
- 湿った状態を好むので、鉢底から水が抜けるほどたっぷり水をやる。鉢の下に皿を置くと良いが、水はためない(ためると、根が窒息しやすくなる)。
- 家の蚊などが減ると、過度な期待はしない。



ムシトリスミレ(と)



オオバナイトタヌキモ(吸)

「食べカスはどうなるの？」
 捕まえた虫は消化液で溶かし、葉の表面の腺毛から吸収します。不要な部分(ハネなど)は、動物のように「ペッ」と吐き出したり、ウンチを出したりするわけではなく、風で飛ばすなどして排出します。サラセニアなどは、中にカスがたまって、いずれ倒れますが、それが肥料になり、新しい株が生かされます。

どりと同じ仕組み。例／サラセニア、ダーリングトニア
■吸い込み式わな型…スポイトを押し潰したような形で、主に水中のミジンコなどを吸い込む。一緒に吸い込んだ水は出し、スポイトをペタンコにして虫を押し潰す。例／タヌキモ

■もんどり型…筒状の葉の内部に下向き毛が生えていて、中に入ると、もう戻れない！ ちょうど魚とり用の「もん

ずい」の仕組み。例／ムシトリスミレ、モウセンゴケ
■とりもち型…葉の表面の腺毛からネバネバした液を分泌し、止まった虫を逃がさない。例／ムシトリスミレ、モウセンゴケ

■落とし穴型…つぼ状の袋に消化液を含んだ水をため、袋から出る蜜で虫を誘う。つぼの上部は口ウ質でツルツル。足を滑らせて中に落ちた虫は溺れてしまう。例／ウツボカスラ

■二枚貝式わな型…二枚貝が口を開けた姿で虫が来るのを待ち、感覚毛(センサー)の役割に触れるとパクッ。捕虫葉を閉じて、捕まえる。例／ハエトリグサ、ムジナモ

「すごい捕獲テクニック！」
 「食虫」とは言うものの、もちろん植物。光合成しているのだから、虫を捕らなくても生きていけます。でも、自生地は養分が少なく、足りない栄養を補うために、虫を捕まえ、消化・吸収できるように変化していきました。種類によっては、ミジンコや小動物などを捕る場合も！ ウツボカスラ(別名・ネペンテス)には袋が長さ30cmほどになるものがあり、ネスミヤカエルが入っていることもあります(通常は、中から食い破るなどして脱出する)。



二枚貝式わな型
 代表選手のハエトリグサ(別名ハエジゴク)は、夏頃によく市販されます。つい触りたくなりますが、葉を閉じるにはかなりの力が必要。頻りに触ると葉が枯れることもあるので、避けましょう。



食虫植物の？ はてな

虫を捕まえて、養分にする“食虫植物”。熱帯生まれと思われがちですが、寒冷地から温帯、熱帯まで、世界中に幅広く分布しています。日本にも、モウセンゴケやタヌキモの仲間が自生していて、モウセンゴケは兵庫県の六甲山系などでも見られます。ちょっとびっくり不思議な食虫植物の世界をのぞいてみましょう。